

令和 5 年 5 月 24 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00677

研究課題名(和文) 所格交替の共時的・通時的発達に関する構文文法的研究

研究課題名(英文) A Construction Grammar approach to the Synchronic and Diachronic Developments of Locative Alternation

研究代表者

石崎 保明 (Ishizaki, Yasuaki)

南山大学・外国語教育センター・教授

研究者番号：30367859

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、これまで議論されることのなかった所格交替(locative alternation)という現象の歴史的発達、特に後期近代英語期(1700-1900年頃の英語、以下LModE)以降における発達の実態を明らかにし、その通時的変化を構文文法理論の視点から説明することを目的とした研究である。

研究成果としては、途中コロナ禍による研究の滞りがあったものの、研究期間の1年間延長を認めていただいたこともあり、当初の目標はおおむね達成できたと考える。研究成果公表の内訳は、図書5冊(いずれも共著、うち1冊は海外の出版社から出版)、研究論文1編、学会発表4回、となっている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代英語の所格交替はこれまで様々な理論的枠組みで活発に研究されてきた言語現象であるが、その歴史的発達を扱った研究は、管見の限り、皆無であった。本研究では、まず、代表的な所格交替動詞であるloadやsprayが、今から100年ほど前には所格が“交替”する動詞ではなかった事実を提示できたのが大きな成果の1つである。また、これまで所格交替動詞はいくつかの種類に分類されてきたが、本研究ではそのクラス内の動詞の歴史的発達や構文間でのふるまいの類似点や相違点を実証した。この結果は、動詞クラスを重視した従来のいくつかの研究に対して一石を投じる発見でもある。

研究成果の概要(英文)： Main purposes of this study are (i) to show how verbs and constructions in the locative alternation developed from the Late Modern English period up to present-day English, and (ii) to explain these developments from a perspective of diachronic construction grammar.

Throughout this study, I published 5 books (as a co-author, including one which published from a publisher located in the Netherlands), one research paper, and 4 oral presentations.

研究分野：英語史

キーワード：所格交替 通時的構文文法 後期近代英語 構文変化

1. 研究開始当初の背景

現代の言語理論にはさまざまなものがあるが、その中の1つである認知言語学とその流れを汲む構文文法理論(以下、総称してCLとよぶ)は、認知科学諸分野の研究成果なども柔軟に取り込みながら、発展を続けている。CLは言語の構文研究の進展に大きく寄与する可能性を秘めているものの、実際の研究では、現代の話者が日常的に用いる言語現象を対象とする傾向が顕著であり、いくつかの「構文」のタイプを措定し、それらをネットワークとして特徴づける研究が主流である。もちろん、これらの研究の蓄積がCLの発展を支えているわけであるが、ここで問題となるのは、多くの場合、ヒトの認知能力の所産として想定とされる「構文」の存在が暗黙裡に分析の前提とされ、なぜそのような「構文」が現代語話者の言語知識の中に存在しているのか、という視点での探求が欠落しているという事実である。本研究課題が取り上げる所格交替には(1) load the truck with hay (以下、場所目的語構文とよぶ)と(2) load hay onto the truck (以下、物材目的語構文とよぶ)という2つの構文が関係するが、これらの構文の関係性については、過去40年以上の間、CLを含むさまざまな理論的枠組みの中で活発に議論されてきた。しかしながら、交替する2つの構文の通時的発達を考察した研究は、管見の限り、国内外を問わず、研究代表者の試験的研究を除き、皆無であった。

2. 研究の目的

以上の学術的背景を踏まえ、本研究課題における学術的な問いは、CLで想定されている「構文」がいかんして「構文」となったのか、そして、その構文の変化がCLに基づく通時的構文文法理論の枠組みでどのようにして捉えることができるのか、の2点に集約される。この2つの問いに余すところなく答えるのは容易なことではない。しかしながら、たとえその一端であっても、「構文」に至る通時的プロセスを明らかにしていくことは、CLが理論的に想定する各々の構文タイプのネットワーク上の位置づけに動機づけを与えることにつながり、ひいては、当該分野のみならず、語彙意味論や歴史言語学が進展する契機にもなりうる。本研究の目的は、(1)所格交替という主要な交替現象の後期近代英語期(1700-1900年頃の英語、以下 LModE 期)における使用の実態を明らかにすること、および、(2)その通時的变化を、CLの視点をもつ理論的枠組みである通時的構文文法理論を用いて説明すること、の2点である。

3. 研究の方法

本研究は、所格交替に関連する動詞および構文の共時的分布・通時的变化に関する実証研究と、それらの通時的発達をCLの観点から説明する理論研究、に大別される。

実証研究においては、所格交替にかかわる構文が発達したと考えられる LModE 期に焦点を定め、電子化された言語資料(以下、電子コーパス)ととりわけ The Corpus of Late Modern English Texts を用いて、対象の動詞がどのような文脈で使用されているのかといったことにも注意を払いながら調査を行い、動詞と構文の関係およびその使用頻度の推移を調査した。電子コーパスは品詞の解析などがあらかじめ行われているものもあるため、それらを可能な限り参照しながら、手探りで用例を採集した。

理論研究においては、実証研究で得られたデータを通時的構文文法理論の観点から考察した。通時的構文文法理論とは、言語の歴史的な変化を構文文法理論の理念に基づいて研究する理論であり、最も包括的な研究書として Traugott and Trousdale (2013)を本研究の基盤に置いた。ただし、このような研究書があるとはいえ、通時的構文文法理論は言語変化に対する新しい接近法であることから、その研究手法や言語事実の捉え方についての研究の蓄積が多いわけではない。そこで本研究では、この理論の理解と整備を進めながら、これまでに先行研究の無い所格交替の歴史的発達過程について、通時的構文文法理論の観点から理論研究を試みることにした。

なお、実証研究と理論研究の双方にかかわることとして、文献学や時代背景に関する知見も不可欠である。特に LModE 期は現代英語に存在している構文の発達を知る上では重要な時代であり、現代英語に存在する多くの構文が発達した時期でもある。当時の言語や社会の環境を理解するために必要な文献も調査の対象とした。

4. 研究成果

研究成果を述べる前に、本研究期間の変更について言及する必要がある。本研究の当初の採択期間は2018年度からの4年間であったが、期間中にコロナ禍があり、ほぼ1年間にわたり研究に向き合うことができない状況となった。幸い研究期間の1年間延長を了承いただいたことにより本研究期間が5年間となったが、実質的には当初予定していた4年間での研究成果ということになる。

本研究期間中においては、実証的研究と理論的研究の双方において、いくつかの大きな成果があったと考えている。以下、実証的研究と理論的研究の成果を簡潔に述べる。

まず、実証的研究についてであるが、コロナ禍で当初計画していた時期に英国大英図書館での調査ができなかったこともあり、日本国内で利用可能な電子コーパスを中心に言語事実の発掘

を行った。具体的には、ARCHER (A Representative Corpus of Historical English Registers) という電子コーパスを用いて所格交替動詞である load と spray の LModE 期における使用状況を調査し、現代英語で代表的なこれらの動詞がともに所格が“交替”する動詞ではなかったこと、および spray については動詞としての使用自体がほとんどなかったことを実証した。この事実は、依拠する理論にかかわらず、現代英語の所格交替研究のほとんどが load または spray を用いてなされていることを踏まえると、予想外ともいえる事実である。また、LModE 期における load の使用状況と通時的な発達過程から、場所目的語構文に関しては、「名詞>形容詞(過去分詞)>動詞」という通時的なカテゴリー変化があったと仮定した。以上の成果は、査読を経て、John Benjamins という言語学の専門書を数多く出版している海外出版社から発刊された *Late Modern English: Novel Encounters* という研究図書(論文集)に掲載された。

上記の研究は、ARCHER という言語コーパスを用いた研究である。ARCHER は LModE 期よりも前の時期から現代英語までの使用状況を知る上では有効であったが、収録語数が少ないという問題があった。また動詞についても、load と spray のみを対象として調査が行われたものである。所格交替にかかわる動詞や構文の使用状況をより詳細に理解するためには、さらに収録語数の多い電子コーパスを用いる必要があるとともに、所格交替する他の動詞および動詞クラスの使用状況やその変化を調査する必要がある。研究期間内では、CLMET (Corpus of Late Modern English Texts) という LModE 期のイギリス英語資料 3,400 万語を収録した電子コーパスを用いて、load や spray だけではなく、smear, cram, pack, その他 sprinkle や splash などのいわゆる spray クラスの動詞などにも調査対象を広げた。

その調査の結果、同じ動詞クラスに分類されている動詞でも個々の使用領域や発達過程が異なる場合があり、LModE 期では所格交替にかかわる場所目的語構文と物材目的語構文のどちらか一方に使用が偏っていた動詞があったり、あるいは両方の構文にバランスよく生起する動詞があったりした。これらのデータは、動詞クラスをその研究単位として所格交替を特徴づけていた従来の一部の理論研究に対して、一石を投じることにもなる。その内容は、4 件の学会発表と 2 件の図書(『文法化・語彙化・構文化』、『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論 3』)などにて公表している。

理論的な研究の成果としては、通時的変化の中心的な課題でもあった文法化と語彙化といった言語変化を通時的構文文法理論の観点から捉え直したことを成果として挙げるができる。その内容は前出の『文法化・語彙化・構文化』の第 1 部で事例研究とともに詳述している。また、CL では構文をネットワークの観点から特徴づける研究が進められているが、このネットワークをヒトの認知能力や言語の通時的発達の観点からどのように捉えればいいのか、という理論上の問題がある。この問題についてはまだ明確な答えが出せていない状況ではあるが、英語史全体という視点、あるいは所格交替とは別の構文の発達状況との関係の中で考えていくという視点が必要だと考えている。そのような主張を『言語の本質を共時的・通時的に探る - 大室剛志教授退職記念論文集』の中の「交替と通時的構文文法」という論文の中で発表した。

上述の、所格交替を他の構文との関連で考えるという観点について、所格交替に関連する構文の 1 つである場所目的語構文には、「全体性の解釈」があるといわれている。例えば、場所目的語構文の load the truck with hay という表現では、hay (干し草) がトラック(truck)全体に敷き詰められているという解釈されることが多い。このような全体的解釈を伴う表現には、場所目的語構文の他にもセッティング主語構文(setting subject construction)というものがある。この構文は場面・場所(セッティング)を表す名詞句が主語位置にくるタイプの構文である。例えば、The garden is swarming with bees. (その庭にはハチが群がっている)という文では、ハチの群れが庭全体に広がっていると解釈される傾向がある。本研究では、所格交替を考える上で重要な概念である「全体的な解釈」にかかわる場所目的語構文とセッティング主語構文の関係性についても考察した。その成果は、『語法と理論との接続をめざして』内の「セッティング主語構文が描く場面 通時的考察」として公表している。

ところで、具体的な言語表現には、通常、複数の抽象的な構文が関わっていることが多い。例えば、Hasn't the cat been fed yet? (猫はまだ餌をもらってないの)という文には、主語-助動詞倒置構文、否定構文、受動構文、現在完了構文、他動詞構文といった構文が関わっている (Traugott and Trousdale (2013))。このように、1 つの言語表現に対する構文間の重なりは CL で標準的に想定されている考え方である。これは、1 つの構文を調べる際には、調べたいその 1 つの構文だけではなく、それが使われる際にかかわりうる他の構文についても念頭に置いて調査する必要があることを示唆している。それでは、数多くある構文の中でどの種類の構文を調査の対象とすべきなのかについて、現在でも理論上の問題として残されている。本研究では、過去の研究代表者の研究成果から、所格交替にかかわっていると考えられる構文をいくつか選び、所格交替動詞の使用状況を調査した。この考え方については、特に 2023 年に口頭発表した「英語における Spray クラス所格交替動詞の歴史的発達について」の中で議論している。

[雑誌論文](計 1 件)

石崎保明「所格交替における構文の歴史的発達」、単著、2019 年 8 月、『第 70 回日本英文学会中部支部大会プロシーディングス』、日本英文学会中部支部、web による公開 (chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefndmkaj/http://www.elsj.org/chubu/2018%20proceedings/ishizaki_yasuaki.pdf) (2p.) (査読無)

〔学会発表〕(計4件)

- (1) 石崎保明 (2023) 発表標題：英語における Spray クラス所格交替動詞の歴史的発達について、言語変化・変異ユニット 第10回ワ-クシヨップ
- (2) 石崎保明 (2022) 発表標題：後期近代英語期における所格交替について、言語変化・変異ユニット 第8回ワ-クシヨップ
- (3) 石崎保明 (2019) 発表標題：通時的視点から見た英語の所格交替について、言語変化・変異研究ユニット第5回ワークシヨップ
- (4) 石崎保明 (2018) 発表標題：所格交替における構文の歴史的発達、日本英文学会中部支部大会第70回大会シンポジウム、日本英文学会中部支部大会

〔図書〕(計5件)

- (1) 『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論3』、共著(小川芳樹、中山俊秀、石崎保明ほか27名) 2022年12月、開拓社、445p。(執筆担当部分：Part I (認知言語学・構文文法・用法基盤モデル) 1論文目「後期近代英語期における cram と pack を含む構文の所格交替について」, pp. 30-43. (13p.)) ISBN: 9784758923774
- (2) 『言語の本質を共時的・通時的に探る - 大室剛志教授退職記念論文集』、共著(田中智之、茨木正志郎、石崎保明ほか32名) 2022年3月、開拓社、448p。(執筆担当部分：第7章「交替と通時的構文文法」, pp. 78-90. (13p.))
- (3) 『語法と理論との接続をめざして』、共著(金澤俊吾、大谷直輝、柳朋宏、石崎保明ほか17名) 2021年9月、ひつじ書房、384p。(執筆担当部分：英語史内の「セッティング主語構文が描く場面 通時的考察」, pp. 129-147. (19p.)) ISBN: 9784823410208
- (4) 『文法化・語彙化・構文化』、共著(小川芳樹、石崎保明、青木博史) 2020年7月、開拓社、294p。(執筆担当部分：第1部「認知言語学に基づく文法化・語彙化・構文化の分析」, pp. 1-86 (86p.)) ISBN: 9784758914222
- (5) *Late Modern English: Novel Encounters*, 共著(Beal, Joan, Hickey Raymond, Yasuaki Ishizaki ほか15名) 2020年3月、John Benjamins Publishing Company、359p。(執筆担当部分：Part II. Morphosyntax内の“A Diachronic Constructional Analysis of Locative Alternation in English: with Particular Attention to load and spray”, pp.144-163. (20p.)) ISBN: 9789027205087

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 石崎保明	4. 巻 2018年度
2. 論文標題 所格交替における構文の歴史的発達	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 2018年度中部支部第70回大会プロシーディングス	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 石崎保明
2. 発表標題 英語におけるSprayクラス所格交替動詞の歴史的発達について、
3. 学会等名 言語変化・変異ユニット第10回ワ - クシヨップ
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 石崎保明
2. 発表標題 後期近代英語期における所格交替について
3. 学会等名 言語変化・変異ユニット第8回ワ - クシヨップ
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 石崎保明
2. 発表標題 所格交替における構文の歴史的発達
3. 学会等名 日本英文学会中部支部第70回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石崎保明
2. 発表標題 通時的視点から見た英語の所格交替について
3. 学会等名 言語変化・言語変異研究ユニット第5回ワ - クシヨップ
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 小川 芳樹、中山 俊秀、石崎保明、佐藤陽介、下地理則、新谷真由、鈴木亨、高橋英光、堀内ふみ野、前田満、青柳宏、秋本隆之、茨木正志郎、新国佳佑、和田裕一、岸本秀樹、森山倭成、杉崎鉦司、田中智之、時崎久夫、縄田裕幸、前田雅子、村杉恵子、柳朋宏、佐野真一郎、高橋康徳、南部智史、宮川創、藤田耕司、始め合計30名	4. 発行年 2022年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 464
3. 書名 コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論3	

1. 著者名 家入葉子、石崎保明、植田正暢、内田充美、大谷直輝、樗木勇作、金澤俊吾、岸浩介、木山直毅、久米祐介、柴田かよ子、中村文紀、縄田裕幸、平沢慎也、廣田友晴、藤川勝也、松山哲也、柳朋宏	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 384
3. 書名 語法と理論との接続をめざして	

1. 著者名 金子義明、阿部潤、滝沢直宏、田中伸一、吉田幸治、西脇幸太、石崎保明、茨木正志郎、内田脩平、樗木勇作、夏思洋、笠井俊宏、久米祐介、小池晃次、小林亮哉、近藤亮一、佐藤嘉晃、杉浦克哉、田中智之、始め合計35名	4. 発行年 2022年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 448
3. 書名 言語の本質を共時的・通時的に探る	

1. 著者名 小川 芳樹、石崎 保明、青木 博史	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 312
3. 書名 文法化・語彙化・構文化	

1. 著者名 Merja Kyto, Erik Smitterberg, Joan Beal, Lieselotte Anderwald, Julia Bacskai-Atkari, Tomoharu Hirota, Yasuaki Ishizaki, Rita Queiroz de Barros, Ulrich Busse, Nuria Calvo Cortes, Julia Landmann, Gerold Schneider, 6 more	4. 発行年 2020年
2. 出版社 John Benjamins Publishing Company	5. 総ページ数 359
3. 書名 Late Modern English: Novel Encounters	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------